

日本ビザンツ学会第6回大会

小田昭善（大阪府立盲学校教諭）

「10世紀後半におけるビザンツ東方辺境支配をめぐる諸問題について－アンティオキアの事例を中心に－」

報告要旨：

10世紀後半から11世紀前半にかけてのビザンツ帝国における属州統治のありかたについては、N.Oikonomidésらの研究により、これまで以下のような叙述が通説とされてきた。すなわち、周辺世界に対する守勢から攻勢の時代への変化に対応して、従来のビザンツ属州支配の基礎であったテマ体制が崩れ始め、東方辺境地域に多くの「小テマ」（アルメニカ・テマ）が設置された。さらに、それらを統括する軍政単位としてドゥカトンあるいはカテパナートが形成され、主たる地域的軍事指揮権も従来のストラテegosからドゥクス、カテパノへと移行した。このような変革はバルカンなど西方にも順次導入され、帝国の軍制、属州統治に大きな構造変化が起こったとされる。

しかし、近年のC.HolmesやP.Stephensonの研究は、ドゥカトンなどの成立を新たな辺境統治システムの確立としてとらえる従来の学説に対して疑問を投げかけている。Holmesによれば、当時の属州統治研究における基礎史料とされてきたタクティコン（官職席次一覧）は、現実の属州支配構造を伝えているものではなく、この時期の帝国辺境統治は、内外の諸情勢に応じて常にフレキシブルに変化しており、ドゥクスの任命も、時にアド・ホックな性格の強いものであったとされる。彼らの研究は、ビザンツの統治システムを固定的、静的に捉えるのではなく、帝国が千年にわたって存続しえた要因のひとつとして、わが国の研究でも指摘されている統治の「柔軟性」に着目した点で意義のあるものと言えよう。

Holmesの研究は、主にバシレイオス2世時代を対象とし、小アジア、バルカン、南イタリアなど、当時の帝国のほぼ全領域を扱っているが、個々の地域の考察については今後さらなる分析が必要な点も見受けられる。本報告では、先行研究が多く史料も比較的整っているアンティオキア地域を事例として、Holmes説の検証を試みたい。アンティオキアは、7世紀以降イスラム勢力の領域下に置かれていたが、969年にビザンツに再征服された後にはドゥクスが配置され、帝国の小アジア東南国境域の戦略拠点として重要な地位を占めることとなる。概して当時の東方国境域では、帝国に対するイスラム勢力の圧力が減じたことにより軍事的緊張は緩和されたが、それとは対照的に、アンティオキアを中心とする北部シリアは、エジプトのファーティマ朝の攻撃にさらされることとなった。また、帝国内ではスクレロス、フォーカスの大反乱がアンティオキアの統治にも影響を投げかける。当時の内外の大変動に翻弄されつつ、ビザンツ皇帝政権は、どのようにこの都市を支配しようとしたのか。記述史料や印章史料などを参照しつつ、また、イスラム側の諸研究にも眼を配りながら、アンティオキア統治の諸問題を明らかにすることが本報告の課題である。